

学位論文審査結果の要旨

所属	三重大学大学院医学系研究科 乙 生命医科学専攻 腫瘍医科学講座 腫瘍集学治療学分野	氏名	松永 秀俊
審査委員	主査 伊藤 正明 副査 鈴木 秀謙 副査 片山 直之		

(学位論文審査結果の要旨)

Prevalence and Countermeasures for Venous Thromboembolic Diseases Associated With Spinal Surgery: A Follow-up Study of an Institutional Protocol in 209 Patients

著者らは論文において下記の内容を述べている。

背景：整形外科手術後に発生する深部静脈血栓症（DVT）は、肺血栓塞栓症（PE）の発生に関与するため、その対策は重要である。本研究の目的は、脊椎手術患者の周術期（術前、術後）におけるDVT発生率を調査し、整形外科教室で行っているDVT対策プロトコールの有効性を評価することである。

方法：術前後にDVTスクリーニング目的に下肢静脈エコーを施行し得た209例を対象とした。男性121例、女性88例、手術時平均年齢64歳で、疾患内訳は、脊椎変性疾患147例、転移性脊椎腫瘍21例、脊椎・脊髄腫瘍7例、脊椎外傷10例、その他24例である。整形外科教室のDVT対策プロトコールは、例外を除き、術中より下腿ストッキング、間欠的フットポンプを使用、早期離床、術後予防的抗凝固療法を行わないことを基本方針とした。

結果：術前よりDVTを認めた症例は9例(4.3%)で、近位型1例(0.5%)、遠位型8例(3.8%)であり、近位型DVTを認めた1例では、術前に下大静脈フィルターを挿入した。一方、術後の新規発生DVTは14例(6.7%)で、近位型2例(1.0%)、遠位型12例(5.9%)であった。術後にPE(近位型DVT)を認めた症例は、脊髄腫瘍および脊椎外傷の手術後に発生しており、抗凝固療法及び下大静脈フィルター挿入が行われた。脊椎手術周術期にDVTを発生した23例のうち下肢静脈エコー検査の追跡調査可能であった20例中17例(85%)でDVTの消失を確認した。

脊椎手術周術期において下肢静脈エコーによるDVTスクリーニングの結果、対象者の11%にDVT発生が確認された。整形外科教室にて行っているDVT対策プロトコールにより、DVT発生例の80%以上でDVTは自然消失して

おり、その有効性は概ね良好であったが、術後2例にPEが発生していた。8th American College of Chest Physicians Guidelinesでは、高齢者、悪性腫瘍患者、神経麻痺患者、高侵襲手術症例は、脊椎手術後DVT発生の高リスク群であり、術後、予防的抗凝固療法の使用を推奨している。一方で術後の硬膜外血腫発生の危険性も指摘されている。本研究においては、DVT予防対策を行うも、高リスク群で実際にPEが発生しており、術後の予防的抗凝固療法の必要性を再認識した。

以上のように、本論文は脊椎手術前後のDVTの発生率と整形外科教室で行っているDVT対策プロトコルの有効性を評価した論文であり、学術上極めて有益であり、学位論文として価値あるものと認めた。

Spine

第39巻 第10号 P.791~P.797 2014年5月掲載

Koji Akeda, Hidetoshi Matsunaga, Takao Imanishi, Masahiro Hasegawa,
Toshihiko Sakakibara, Yuichi Kasai, Akihiro Sudo.